

日中対照言語学会第43回大会（2020年度冬季大会）のご案内

記

日時：2020年12月20日（日）9：20～17：00

会場：オンライン会議

参加費：無料（会員、非会員共通）

プログラム

総合司会 王 学群（東洋大学）

入室開始 9:00～

開催挨拶 加藤 晴子（東京外国語大学） 9：20－9：28

研究発表 1. 接続助詞で終わる言いさし文の類型に関する日中対照分析：関連性理論の観点から
何 潔（九州大学大学院） 9：30－10：08

研究発表 2. 中国語換言標識“也就是说”の対人関係的機能
龐 龍傑（名古屋大学大学院） 10：10－10：48
以上司会 下地 早智子（神戸市外国語大学）

休憩（10分間 10：50－11：00）

研究発表 3. 中国語のSVOが日本語の自動詞表現に対応する場合について
北村 よう（東海大学） 11：00－11：38
以上司会 彭 飛（京都外国語大学）

研究発表 4. 「V-てあげる・てくれる」と“給V・V給”の対応関係について
古賀 悠太郎（静宜大学） 11：40－12：18
以上司会 豊嶋 裕子（東海大学）

昼休み（60分間） 12：20－13：20

研究発表 5. 可能性を表す中国語の認知的モダリティの“要”に関する日中対照研究
張 婷（東京外国語大学大学院） 13：20－13：58

研究発表 6. 中国語可能補語を見る－教学的立場から
安本 真弓（跡見学園女子大学）・吉田 泰謙（関西外国語大学） 14：00－14：38
以上司会 時 衛国（山東大学）

休憩（10分間：14：40－14：50）

研究発表 7. 格支配による対象移動動詞の分類と考察
趙 金昌（筑波大学大学院） 14：50－15：28
以上司会 須田 義治（大東文化大学）

研究発表 8. 中日両言語における慣用表現の使用頻度に関する一考察
－翻訳された洋画の字幕を手がかりに－
牛 雨薇（埼玉大学大学院） 15：30－16：08
以上司会 平山 邦彦（拓殖大学）

研究発表 9. 『紅樓夢』における対称詞に関する研究－歴史語用論の観点から－
葛 欣燕（九州大学） 16：10－16：48
以上司会 張 黎（大阪産業大学）

閉会の辞 彭 飛（京都外国語大学） 16：50－17：00

閉会 17：00

2020 年度冬季大会

研究発表 テーマ・発表者と発表要旨

1. テーマ：接続助詞で終わる言いさし文の類型に関する日中対照分析：関連性理論の観点から

何 潔(九州大学大学院)

要旨：

現代日本語の会話では、接続助詞で終わる言いさし文がしばしば見られる。一方、田(2015)は、中国語には日本語のような従属節のみで使用される「言いさし」現象が存在しないと指摘している。日中両言語には語順の違いがあるため、単に接続助詞で終結したという形式上から言いさし文を認定するとしたら、中国語には同じように接続詞が文末に出現する文は確かに存在しないと言える。しかし、中国語には言いさし文が存在しないという見解は必ずしも妥当ではなく、検討の余地があると思われる。そこで、本発表では、関連性理論の観点から言語化されていない主節の内容が文脈上から復元できるかどうかによって、日本語の言いさし文の類型を分析した上で、中国語には日本語のような言いさし文が存在するかについて分析し、日中両言語における言いさし文の相違点を明らかにすることを目的とする。その結果、日本語には不完全な複文、関係づけの言いさし文、言い尽くしの「言いさし文」の3種類の言いさし文が存在する一方、中国語には不完全な複文と関係づけの言いさし文しかないことがわかった。つまり、中国語には、言い尽くしの「言いさし文」が存在しないということである。これは、日中両言語における言いさし文の顕著な差と言える。

2. テーマ：中国語換言標識「也就是说」の対人関係的機能

龐 龍傑(パンロンジイエ・名古屋大学大学院)

要旨：

本研究は中国語において言い換えを示す標識「也就是说(～はまさに～も言うのだ)」に着目し、それが伝達する対人関係的意味を明らかにすることを目的とする。これまで「也就是说」に関する多くの研究は、通時的な観点からその文法化(Biq 2001)を分析し、談話標識としての機能(史金生, 胡晓萍 2013)や言い換え前後の文の意味的な関係(Feng 2010)などを考察しているが、内部構成要素の意味的特徴に関する分析や対人関係の視点からの考察は、まだ見当たらない。本研究は、「就是(まさに～だ)」という断言を表す意味的要素に着目し、それを含む「也就是说」が換言内容に対して送り手の確信を示すことにより、受け手との連帯感・共同責任を示し、語用論的に対人関係の機能を果たすと考える。本研究は、分析枠組みとして、メタ談話(Hyland 2005)と間主観性

(Nuyts 2001) を用いる。また、コーパス用例を用い、コロケーションや文脈において送り手が確信を示す根拠、その他の中国語換言標識、日本語換言標識との異同などを考察し、「也就是说」の対人関係的特徴の解明を試みる。

3. テーマ：中国語の SVO が日本語の自動詞表現に対応する場合について

北村 よう（東海大学）

要旨：

中国語母語話者にとって日本語の動詞の自他の区別が難しい原因は、一般に中国語が自他同形であるからだとされる。本発表では、自他の混乱の原因の一つとして、中国語で SVO の語順で表される文が日本語の自動詞的表現に対応する例を取り上げる。

中国語の SVO が日本語の自動詞に対応する例としてはまず存現文が挙げられる。しかし、一般に存現文に分類されない動詞であっても、S に場所を表す名詞が来た場合、日本語で自動詞的表現が対応することがある。そのような動詞には、「表現」「描写」などの「表現」類、「包含」「含有」などの「包含」類、「发现」「看到」などの「発見」類などのタイプがある。これらは、S を〈場所〉ととらえれば、日本語では、〈場所〉ニ 〈モノ・コト〉ガ 〈自動詞〉となり、S が動作主である場合もしくは S を動作主的にとらえた場合は、〈動作主〉ガ 〈モノ・コト〉ヲ 〈他動詞〉となる。

本発表では、中国語の SVO に対応する日本語の自他の決定には S の意味役割が大きく関わっていることを示し、日本語で自動詞と他動詞の違いによって表される区別が、中国語においては動詞の形態以外の手段でも表されることを論じる。

4. テーマ：「V-てあげる・てくれる」と“给 V・V 给”の対応関係について

古賀 悠太郎（静宜大学）

要旨：

日本語の「V-てあげる・てくれる」と中国語の“给 V・V 给”は、ともに元来が授与動詞で、恩恵性も表すことから、対応し得る（翻訳してくれた⇔给他翻译）。そこで本発表では、日中両語の小説（有川浩『阪急電車』、莫言《红蝗》など）から収集した「てあげる・てくれる」、「给」とその対訳を使用して、両者は実際にはどの程度対応するのか、またその理由について考察する。

まず数字を見ると、「V-てあげる」は V 部分のみ翻訳と“给”への翻訳がそれぞれ 64% と 16%、「V-てくれる」は 71% と 9% であった。また、“V 给”は V 部分のみ翻訳と「てあげる・てくれる」への翻訳がそれぞれ 77% と 8%、「给 V」は 65% と 21% であった。つまり、「てあげる・てくれる」と“给”は安定的に対応しているとは言い難い。

ともに恩恵性を表すにもかかわらず実際には対応しにくいのは、「てあげる・てくれる」は恩恵そのものを表現するのに対して（太郎が来てくれた→*太郎给我来了〔一方向〕），“给”は恩恵よりも動作の方向性を表現するからである（留给我们作业→#宿題を出してくれた

〔一恩恵〕)。逆に言えば、恩恵性と方向性がともに認められる場合、両者は対応する可能性が高い。

5. テーマ：可能性を表す中国語の認識的モダリティの“要”に関する日中対照研究
張 婷（東京外国語大学大学院）

要旨：

中国語の認識的モダリティの一つに可能性を表す“要”がある。従来の研究を見渡すと、この“要”の機能の説明として、「事態が成立する必然性を推測する」という見解が見られる。しかし、この“要”は、一見その直後に述べる事態の発生の必然性を推測しているように見えて、実はそうではない。

本研究は、可能性を表す“要”がなぜ「事態発生の必然性の推測」を表さないかを解明した上で、この“要”に対応する日本語表現との違いを明らかにする。“要”に対応する日本語表現のうち、本研究は主に、「だろう」「かもしれない」「に違いない」を取り上げる。可能性を表す認識的モダリティの“要”と、それに対応する日本語の「だろう」「かもしれない」「に違いない」は、「話者には知り得ないこと」という認識を表す点で共通してはいるものの、相違点も少なくない。すなわち、可能性を表す“要”は「事態発生への確信の程度」に言及する機能を持っていないのに対し、日本語の「だろう」「かもしれない」「に違いない」は「事態発生への確信の程度」に言及する機能を持っている、と考える。

6. テーマ：中国語可能補語を見る一教学的立場から
安本 真弓（跡見学園女子大学）・吉田 泰謙（関西外国語大学）

要旨：

中国語の可能表現の中でも特に可能補語は日本語学習者にとって習得しがたい文法項目の1つとされている。発表者はこれまでに第二言語習得理論を踏まえつつ、日本の大学で中国語を履修する学生を調査対象とした中国語可能表現習得状況の測定テストと日本の大学で中国語を教える教員を対象としたアンケートを実施した。この中から可能補語を中心とするデータを抽出し、考察・分析した結果、従来の研究成果を反映した「現行インプット」による指導内容にはさまざまな問題点があることがわかった。そこで、本発表ではこうした問題点の解消を図るべく、安本(2009)などの理論的枠組みを取り入れた「理解可能なインプット」(再定義)によるコンテキスト場面付きの中国語可能補語指導法(試案)を提示する。

7. テーマ：格支配による対象移動動詞の分類と考察

趙 金昌（筑波大学大学院）

要旨：

日本語の移動動詞に関して、これまで数多くの研究がなされてきて、それらは移動を表す自動詞に重きを置いているが、実は他動詞も移動を表すことができる。主に人間の移動を表す自動詞と異なり、他動詞はモノの移動に重点がある。＜移動性＞という素性を持つ動詞は「起点格」「経路格」「着点格」と結びつきやすいと想定できる。ある動詞とある格との結びつきが必須であるかどうか、どれぐらいの必須度があるかを判断するのは非常に難しい。移動動詞の場合は、可能性として起点格、経路格、着点格のいずれとも結びつく能力を持っているが、動詞によって結合可能な格との結びつきにおいて異なる結合頻度を示す場合もある。以上のことを考慮すると、宮島 1986 が提示した結合頻度調査が一つの有効な方法だと言えるだろう。そこで本稿においては、『分類語彙表』と『日本語基本動詞用法辞典』を参考にし、対象移動動詞を考察対象として選定し、宮島 1986 の方法論を参考にしながら BCCWJ における対象移動動詞と場所名詞句との結合頻度を調査し、考察を行う。

8. テーマ：日中両言語における慣用表現の使用頻度に関する一考察

—翻訳された洋画の字幕を手がかりに—

牛 雨薇（にゅう ゆうえい・埼玉大学大学院）

要旨：

学習者の立場によっては、日常会話で用いることばを「慣用表現」と「一般表現」とに二分することができる。本研究は前者を調査対象とし、使用頻度の側面から対照的に考察するものである。

それに関する従来の日中対照研究では、陳（2008）や今井（2014）などが挙げられ、対応の有無や形式・意味の異同について論じられたものが多い。使用頻度を中心とした研究は、顧（2017）のようにコーパスの生起頻度などを指標として現代日本語及び中国語における四字熟語の使用頻度を比較したものがほとんどである。しかし、各コーパスの性格と規模が異なるため、結果を直接的に比較できるかどうかはなお検討する必要があると思われる。

そこで、本研究では現代日本語と中国語に翻訳された欧米の映画の字幕を手掛かりに、両言語の話し言葉における慣用表現、特に下位に分類される慣用句・四字熟語・ことわざ（慣用語・成語・諺語）を絞って、この類の使用頻度について考察、分析する。

9. テーマ：『紅樓夢』における対称詞に関する研究—歴史語用論の観点から—

葛 欣燕 (九州大学)

要旨:

本稿の目的は、歴史語用論の観点から、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を研究の枠組みとして、社会的身分による上下関係と親疎関係が対称詞の選択にどのように影響しているかを解明する。

まず、劉 (2017) の研究に従い、対称詞を大きく「敬称型」「中立型」「愛称型」「直示型」に分類する。次に、椎名 (2014)、劉 (2017) の先行研究を踏まえ、①下位者から上位者への場合、親密な関係では敬称型と愛称型、疎遠な関係では敬称型が使われる、②平等な関係の場合、親密な関係では愛称型と直示型、疎遠な関係では中立型、愛称型と直示型が使われる、③上位者から下位者への場合、親疎関係に関わらず、愛称型と直示型が使われる、という3つの仮説を立てた。更に、清代の貴族の生活を描写する『紅樓夢』における主人公賈宝玉が使っている対称詞に焦点を当て、量的・質的に分析することによって、3つの仮説を検証した。観察の結果、下から上への場合、対称詞の選択により大きな影響を与えているのは、親疎関係よりも相手への敬意を持っているかどうかであることが分かった。また、平等な関係及び上から下への場合、主に使われているのは愛称型と直示型で、親疎関係によって使い分けられている。つまり、Brown & Levinson の理論で西欧語と異なる中国語のポライトネス現象を上手く説明できないところがあり、社会のルールと人間関係も対称詞の選択に影響していると考えられる。